

「中式」と「日式」

藤村建夫

ミャンマー日本・エコツーリズム会長

(独) 国際協力機構客員専門員

2007年8月末に上海に赴任して以来、中国との付き合いが、もうすぐ4年になるうと
している。最初に、駐在1年半、その後は隔月出張して2年半になる。その間、北京オ
リンピックと上海万国博覧会という大きな国威発揚イベントが開催され、国中が熱狂し
た。他方で、毎年のように大きな地震、雪害、干ばつ、洪水が多発した。にもかかわら
ず、年率9%のダイナミックな経済成長が継続し、都市の人々の生活は着実に向上して
いる。だが、内陸部では、なお多くの農民が貧しい生活をしている。こうした内部の格
差を抱えて発展に邁進しているのが現在の中国だ。

レストランに行くと、「中式」、「日式」という文字が目につくことがある。今や上海に
は、世界中で一番多くの日本人が住み、その数は50,000人以上といわれている。日本
料理店も2,000軒を超えるという。「中式」、「日式」と見るたびに「どんな料理かな？」
と想像させられる。「式」というのは、「形式」か「流儀」の意味で、「日式」とは、「日
本形式」あるいは「日本流儀」という意味だろう。上海の人達は、日本食が大好きで、
日本式ラーメン屋、寿司屋、美容院はどこも中国人でいっぱいだ。東京と上海を往来し、
いろんな出来事に会う度に、食べ物に限らない日中の形式、流儀、考え方の違いが常に
頭に浮かんでくる。

東日本大震災は、まことに衝撃的な大災害だ。3月11日、ミャンマーのチン州からヤ
ンゴンに戻った時、BBCテレビニュースで、大津波が釜石の町を丸のみになっている場面
を見て、驚愕した。「これは、本当に起こっていることなのか？」とわが目を疑った。3
月13日に東京に戻り、連日の余震を感じながら、たくさんの被災者が避難所で寒さに
凍えながら救援を待っている姿に胸を打たれた。避難所の多くは学校だった。日本では、
学校は地震、洪水、台風、津波などの災害時に、人々が避難する避難場所の一つに指定
されており、毛布、水、食料などが備蓄されている。残念なことに、今回は、想定を超
えた大津波のために、被害を受けた学校も少なくなかったようだ。ある小学校では、ど
こに避難するかを先生たちが議論している間に避難が遅れ、避難する途中で74人もの
子供たちが亡くなったという。今回の地震と津波の犠牲者約28,000人の内、小、中、
高校生徒の死亡・行方不明者は計約800人で、全体の2.9%。約65%は、60歳以上の
高齢者で、死亡原因の96%は水死であった。人々は毎年、津波防災訓練を受けていた
が、こうした日本式の防災対策も、予想の範囲には限界があったということだ。

このことを知った時、すぐにピンときたことがある。それは、上海駐在中にテレビで見

た、中国の四川大地震の時のことである。あの時、もっとも大きな被害の一つが学校だった。学校では、まだ多くの児童が授業を受けていた時、大地震に襲われ、校舎が次々に倒壊した。約 19,000 人の児童が建物の下敷きになって死亡した。これは、犠牲者計 90,000 人の 21%に当たる。四川省だけでも 6,900 棟の校舎が倒壊した。テレビ中継で、校舎の瓦礫に挟まり、20 c m くらいの隙間から、手だけで助けを求めている女の子を救出する場面があった。約 6 時間でその子は助け出され、人々は喜びにあふれて歓声をあげた。その中継を見ていた私も涙を止めることができなかった。中国では一人っ子政策により、夫婦に子供は一人だから、もしその子供が亡くなったら、親たちの嘆きは計り知れない。

中国には、指定された避難場所というのは、特になさそうで、学校も避難場所として指定されてはいないようだ。「中国では、まだ命が安いからね」と、中国人の友人は自嘲気味に言っている。そうだとすると、授業中の生徒がたくさんいる 4~5 階建ての校舎が、最初に壊れてしまったのは、あまりにも痛ましい。「学校の校舎の強度に問題があったと思われるので、調査してもらいたい」と父兄が市当局に抗議行動を起こしたところ、リーダーたちは、父兄を煽動したとして、当局に逮捕されてしまった。5 年間の懲役刑になったらいい。それにしても、このような中国式、事の結末には、驚かされる。中国と日本では、災害と学校の関係がかくも違っているのかと。

予想を超えたマグニチュード 9.0 の超大型地震とそれによって引き起こされた津波によって、すべての電源を失い、原子炉が溶融してしまった福島第一原子力発電所の事故は、原発安全対策の想定外だったと言われている。これまで、日本国民は、日本の原子力発電所はいかなる地震、津波にも耐えられる技術だという、「日本式原発技術の安全神話」を信じさせられていた。今回の大津波は、こうした「日本式原発技術の安全神話」を完全に壊してしまった。予期せぬ事態に初動が遅れ、次々に危険な新事実が報告されている。終わりの見えない放射能災害の広がり、国民は大きな不安を抱き、一刻も早い終息を願っている。その結果、首相は責任を追及されて、退任を迫られているように見える。だが、首相が別人であったら、原発が引き起こした未知の危険が全て避けられたといえるのだろうか。

中国では、原発事故は報道されてはいないものの、建設工事に伴う手抜き工事は珍しくないといわれている。賄賂を使う業者は賄賂分を手抜き工事で取り戻しているらしい。学校の校舎もその犠牲であったのかもしれない。ある時、テレビを見ていると、ある省の橋の完工式典が行われていた。市の有力者や来賓が全員でテープカットをし、橋を支えていた橋桁が外された。すると完成したばかりの橋が突然、大音響と共に崩れ落ちた。テレビを見ている私も仰天したが、そこにいた人達はもっと仰天しただろう。翌日のニュースでその橋を建設した会社の社長が逮捕されたという。これは、まさに「中国式手抜き工事」の典型であったのだろう。温家宝首相は、「共産党最大の優先事項のひとつ

は、腐敗した党員に対する絶え間ない、かつ容赦のない闘いである」と訴えている。中国と日本は発展過程が異なっており、中国が日本と同じ道を辿るとは思えないが、技術の信頼性と安全性の確保は、国民の命と生活を守るために、いずれの国においても非常に大切なことだ。中国も日本も災害から学んだことは真に多い。これらの教訓をどう活かして、次の災害に備えるか。国民の英知を結集して大いに知恵を絞ってもらいたい。